

2016年2月

一般演題

855(S-703)

P3-12-9 CT, MRI検査および子宮鏡で診断し、経腔ドレナージを行ったWunderlich症候群の1例

敬愛会中頭病院

尾身牧子, 徳嶺辰彦, 高橋美奈子, 大久保銳子, 島袋美奈子, 諸見里秀彦, 城間 肇

【緒言】Wunderlich症候群は重複子宮の片側子宮が盲端であるため子宮留血腫をきたし、同側の腎欠損を合併する症候群である。本邦では片側腔閉鎖を来すOHVIRA症候群の報告は多くみられるが、本疾患の報告は非常に稀である。今回我々は経腔ドレナージを行ったWunderlich症候群の1例を経験したので報告する。**【症例】**12歳女児。8歳時に片腎と診断されていた。受診する5か月前に初潮を迎え、以降強い月経困難を認めた。月経終了後も腹痛が持続するため受診した。経腹超音波検査で圧痛を伴う6cm大の囊胞を認めたため卵巣囊胞茎捻転を疑いCT, MRI検査を施行した。すると両側付属器は正常で、重複子宮の右子宮頸部が囊胞状に拡張している所見を認めた。鎮痛薬で症状が改善せず、全身麻酔下に診察を行った。子宮頸部と子宮口は1つで、そのすぐ右側に囊胞が触れた。子宮口から子宮鏡を挿入したところ、左子宮の内腔に通じ、右子宮の開口部は認めなかった。経腔的に囊胞(=右子宮頸部)を切開したところ、暗赤色の血液の流出を認めた。患側子宮内にフォーリーを3日間留置し、術後5日目退院となった。**【考察】**Wunderlich症候群は子宮留血腫を放置すると、子宮にダメージを来たすほか、子宮内膜症や骨盤内感染を発症し妊娠性が低下するとされ、速やかなドレナージが必要である。片腎で腹痛を認める女児において子宮奇形を鑑別することが重要だと痛感させられた症例であった。また、本症例のように非常に稀な上にバリエーションがある疾患を診断するにあたって、CT, MRI検査および子宮鏡検査は有用であると考えられた。

P3-12-10 当院におけるOHVIRA症候群、Wunderlich症候群の検討

群馬大

小林未央, 小松央憲, 北原慈和, 中里智子, 今井文晴, 岸 裕司, 峯岸 敬

24
般演題

【緒言】Obstructed Hemivagina and Ipsilateral Renal Anomaly (OHVIRA)症候群はミュラー管奇形に伴う重複子宮、片側腔閉鎖、患側腎無形成を合併する疾患である。またWunderlich症候群は重複子宮、片側子宮頸部閉鎖、患側腎無形成を合併する。いずれも骨盤内留血腫、月経困難症を典型的な症状とし類似疾患に分類されるが、両者を比較検討した報告は少ない。今回我々は当院で経験した症例について、両者の臨床的差異を検討した。**【症例】**2004年から2015年に当院で経験したOHVIRA症候群6例、Wunderlich症候群2例について後方視的に検討した。OHVIRA症候群の6例は、初経年齢中央値12歳、初経から診断までの期間は中央値9年。初発症状は月経困難2例、帶下異常2例、月経不順1例、排尿障害1例であった。全例に閉鎖腔壁の小孔を認め、不完全閉鎖であった。合併奇形として1例に尿管瘤、1例にGardner囊胞を認めた。一方Wunderlich症候群2例は初経年齢12歳、初経から診断までは中央値8.5か月、初発症状は月経困難であった。2例とも左右子宮の交通なく完全閉鎖であった。上記8例に対し腔式腔壁開窓術を施行。術後開窓部の閉鎖はなく良好に経過している。Gardner囊胞合併の1例は術後21か月でGardner囊胞に膿瘍を形成し、腹腔鏡下摘出術を施行した。またOHVIRA症候群の1例は術後6年で自然妊娠し、骨盤位のため選択的帝王切開で分娩に至った。**【考察】**当院ではWunderlich症候群に完全閉鎖、OHVIRA症候群に不完全閉鎖が多い傾向が見られた。また治療法に関しては、全例に経腔的腔壁開窓術を施行しているが、再閉鎖や手術に伴う合併症はなく、自然妊娠例も得られており、両疾患に対し有効な治療法である可能性が示唆された。

P3-13-1 子宮筋腫・子宮腺筋症におけるプロゲステロン受容体発現の病理学的検討荏原病院¹, 昭和大², 昭和大病理³吉川信一朗¹, 三村貴志², 石川哲也², 関沢明彦², 九島巳樹³

【目的】子宮筋腫は主として、エストロゲンがその増殖を促進する因子と考えられてきたが、近年プロゲステロンもその増殖に関与していることから選択的プロゲステロン受容体モジュレーター (SPRM : selective progesterone receptor modulator) を使用した子宮筋腫の治療が報告されている。今回、子宮筋腫のプロゲステロン受容体発現を免疫組織学的に確認し、筋腫の性状による発現頻度の違いを検討した。**【方法】**2015年8月に子宮筋腫・腺筋症に対して手術を施行した6症例を対象とした。プロゲステロン受容体の発現を確認し、筋腫の数や変性の有無による影響を検討した。**【成績】**子宮筋腫は5例（変性筋腫3例）、腺筋症1例での患者年齢42.8歳（35–63）で、筋腫個数6.3個（1–15）であった。プロゲステロン受容体は子宮筋腫、腺筋症の全例で陽性であった。**【結論】**子宮筋腫において変性や子宮筋腫の数に関わらず、プロゲステロン受容体が陽性であることが分かった。筋腫の性状、個数に関わらずSPRMが効果的である可能性が示唆された。